

青梅市文化財ニュース

第 1 8 1 号

平成14年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

新発見！！ 2か所になった縄文時代晩期の遺跡

青梅市には縄文時代の遺跡が数多くあります。その中でも縄文時代晩期の遺跡はたったの1か所でした。ところが、今回、さらに新しい発見がありました。

縄文時代と呼ばれる期間は約1万年間に及び、この間は草創期（12,000～9,000年前）、早期（9,000～6,000年前）、前期（6,000～5,000年前）、中期（5,000～4,000年前）、後期（4,000～3,000年前）、晩期（3,000～2,300年前）の6つに区分されています。この区分は、発掘調査で出土した遺物や遺構などによる判断にもとづいて、どの時代のものを位置づけています。

青梅市内では約170か所にも及ぶ遺跡が発見されていますが、現在、その内の約10%が縄文早期に、約25%が前期、約42%が中期、そして、約23%が後期の遺物を伴う遺跡となっています。特に、縄文時代後期後半から晩期の遺跡は極めて少なく、駒木町の『喜代沢^{きよ}遺跡^{ざわ}』のみとなっていました。ところが、このたびの宅地造成工事に伴う発掘調査で、青梅市二俣尾3丁目の『中宿^{なかつゆく}遺跡』と『上生原^{かみおひばら}遺跡』は縄文時代晩期の遺跡であることがわかりました。前者は、平成13年2月から3月まで約140平方メートルを、後者は、平成13年10月から11月まで約80平方メートルの発掘調査が行われ、共に縄文時代後期から晩期にかけての遺構や遺物が出土しました。また、この遺跡は、市道を隔てた両側に位置していますが、ひとつの集落だったと考えられます。

『中宿遺跡』からは、緑泥片岩で作られた長さ51.5センチメートルの石剣^{ゆうけい}や有茎^{せきぞく}の石鏃、22.5センチメートルにも及ぶ磨製石斧などが、土製品では、透かし彫りをイメージするような耳飾りや縄文時代晩期に属する土器片などが出土しました。なかでも、中空で長さ7センチメートルほどのサツマイモのような形をした、縄文時代晩期の異形土器は珍しいものです。一方、『上生原遺跡』では、チャートで作られた石匙^{いしさじ}や石錐^{せきすい}、緑泥片岩製の石棒や石剣などが出土し、土製品では、縄文時代早期から晩期までの土器片に加え、耳飾りや土製円板、そして、縄文時代後期の終わりに比定する注口土器が発見されました。これは、ちょうど醤油（裏面につづく）

さしのような形をし、大きさは10センチメートルぐらいと小型で、注ぎ口もほぼ残っており、縁の部分が少し欠けているだけのほぼ完全な形に近いものです。

このような発掘結果から、市内では縄文時代晩期の遺跡が2か所ということになりました。これからも市内に数多くある遺跡の中で、「これぞ！」というものが出土することによって、これまでの青梅市の歴史が書き換えられるようなことも出てくるでしょう。市民の皆さんのふとしたきっかけが大発見となって、青梅市の歴史年表が書き換えられるようになるかも知れません。期待しています。

(文責 鈴木 晴也)